様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４３８

研究課題名（和文）時間を手がかりとした近世英国演劇の変容に関する研究

研究課題名（英文）A Study of English Renaissance Plays Focused on Chronological Varriations of Plot

研究代表者
境野　直樹（Sakaino, Naoki）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：９０１８７００５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　近世初期英国演劇において、最後の審判へとリニアに向かうキリスト教的時間概念を強く反映させたドラマ（たとえばマーロウの『フォースタス博士』）にたいして、創作年代がさほど遠くないにもかかわらず、『ハムレット』のように意図的に同一モティーフをあたかもデジャ・ヴのように反復・中断させつづける異様な時間軸をもつ作品が存在する。プロットのクロノロジーを意図的に超越することで、舞台はさながら主人公の精神構造の遠近法とでも呼ぶべき効果を強く観客・読者に迫る効果を発揮する。時間芸術である演劇は当然ながらこの乱れを早晩消化しきれなくなり、代わって台頭するジャンルである小説に、その可能性を委譲することになる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ルネサンス英国演劇のプロットの時間軸の描き方の進歩・展開に注目すると、舞台が「物語」記述から「心理描写」への関心にむかう様子が見て取れる。そのことが新しい様式としての小説を準備した様子をたどることで、たとえば「歴史叙述」にひそむ起草者の政治性（直線的な時間軸を持つ叙述）と、批判的・検証的な語りの構造（小説において多様な実験精神とともに展開される内省的・反復的叙述）の相関性について考察するための視座を得ることが可能となる。
　「歴史の終焉」が標榜されて久しいが、安定と自己正当化をめざす「新しい物語」への希求が、ともすればそのような検証的反復・内省を置き忘れるかのような現代の危うさを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Against the mainstream of the dramas of the early English Renaissance in which one strongly reinforced chronology of Christian Humanism prevails as is shown in Marlowe’s Dr. Faustus, some plays confronted such a single chronology and assume various “starting-over” effect as deja-vu like Shakespeare’s Hamlet. Such effects would focus instead on characters’ mental status, and as such, would gradually proved incompatibility with the genre. Lawrence Stern was right when he demonstrated his consciousness of plot-chronology-restriction in Tristram Shandy, and the same breakthrough in narrative technology still has its own way now, say, as in Kazuo Ishiguro’s novels.

研究分野：英語英文学

キーワード：ルネサンス演劇　プロットと時間　ジャンルの変容

１．研究開始当初の背景

英国ルネサンスにおいて、古典劇の作法のみならず、宗教的な効果としての時間の経過に忠実な作品群とはあきらかに異なる時間を描こうとするいくつかの作品の独自性を、奇しくも天文学・海事上の理由から進化した時間の科学の言説との関係から論じることが可能ではないかとの仮説をたてた。正確な計時が科学の進歩と人類・世界の認識の大幅な更新、ひいては宗教と科学のバランスの変更をもたらしたことにより、近代化の影響を受けた舞台では、正統的なキリスト教の権威が揺るぎかねない状況が出来していた。同時にまた、天文学、測量技術、航海術などが一気に近代化し、進歩したこの時代は、宗教と政治のバランスが劇的に動いた時代でもあった。そうした事情が文芸一般、とりわけ演劇にあたえた影響、ひいてはジャンルとしての演劇の限界とそれにかわる特異な叙述形式としての小説の誕生について、特に時間の概念の変容を補助線として考察することが可能ではないかという作業仮説に基づいて、研究をはじめることとした。舞台上で描かれる世界は、科学の進歩によってその虚構性を告発されつつも、同時に科学的事象の背後に神意を読み解こうとする 18 世紀的な精神風土を準備したとも考えられるのであり、神の顕現という文学的主題が近代に向けて一層の洗練を受けるための契機となったことを、作品の分析を通じて検証する意義があるだろうとの感触を得ていたことも、本研究の着想につながっている。

２．研究の目的

近世初期英国演劇における時間の概念の変化と、それが劇の様式の及ぼす影響について研究することによって、時の概念の精神史、天文学・航海術の進歩と資本の蓄積による市民の台頭に伴う時計の普及と、英国社会における職人集団の形成に寄与したプロテスタンティズムが演劇に与えた緊張関係を解明する。その知見に基づいて、版本の異動の検証を含む精読を通じて演劇作品における一見異様な時間の流れについての新たな解釈の可能性を探るとともに、ジャンルとしての演劇の展開とその衰退（および小説の勃興）について新たな視座を得ることが、本研究の目的である。演劇と小説の顕著な相違点のひとつはプロットの時間軸の制約の大きさに求めることができるはずであり、時間軸の制約から逃れた小説は、部分的であるにせよ、「物語形式」からの逸脱というパラドックスを提示することになるだろう。「歴史の終焉」と物語の変容の、これまで問われることが少なかった近代演劇に対して科学的言説がもたらした影響を考慮した視点からの考察はいかにして可能か–本研究の目的はその可能性についての予備的考察を含むものとなっている。クロノロジーの制約を意識しはじめた舞台は登場人物のアクションをではなく「思索」を劇化することを追求し始める。その結果、『ハムレット』にみるように、その台詞を全面的に信頼することが困難なキャラクターが登場してくるのであり、人物造形におけるこうしたある種の「リアリズム」効果は、やがて小説においてその語りの技法の展開・進化というかたちで開花することになる。この文学史的一大事件を演劇の側から、しかも当時の科学の言説が与えた影響を考慮しつつ検証することが、本研究の目的であった。

３．研究の方法

プロットのクロノロジーの観点から矛盾をはらむ作品、クロノロジーがねじれた演劇作品を、16-7 世紀の演劇作品群から抽出し、個々のケースについて、その特徴を精査することで、演劇がその劇化を試みる内容の大きさや性格ゆえに、ジャンルとしての限界を超えてゆく様子を観察し、新たなるジャンルである小説にその機能を託すことになる必然性を確認した。具体的には古典ローマ劇のいわゆる「三一致の法則」が、演劇の近代化とともに崩壊し、そのいっぽうでその法則性を遵守する身振りがことさらに強調される風潮が、17 世紀初頭の英国演劇には色濃く見られるのであり、とりわけプロットの多重化が、「一方その頃…」的な共時性を作品世界に生起させるにおよんで、演劇はその「時間のリアリズム」を決定的に変容・破綻させるのであった。あわせて社会全体からみた時間という概念のとらえ方、日常生活における時間の意味づけの変化なども、周辺的なさまざまな言説を手がかりに研究した。具体的には時間計測と天文学をめぐる 17 世紀の科学史の文献、時計の精密化の歴史、海事史など多岐にわたるが、特に航海術・海洋関係の知見の進歩については、演劇・小説双方にたいして、作家の想像力を大幅に促進した形跡が看守されることから、今後本研究を発展させたかたちでの展開が期待されうるところでもあり、EEBO および 18 世紀コレクションなどの電子データにあたっての調査の割合が増えることとなった。

演劇における時間軸の特徴の研究は、必然的に隣接ジャンル、とりわけ文学史的に後置されることになる小説におけるそれとの関係性で検証される必要がある。ここでも時間の経過の描写に重きを置いた作品群をとりあえず精査することとなった。とりわけ衝撃的だったのは、ローレンス・スターン『トリストラム・シャンディ』における、自意識過剰としか説明のしようがないメタナラティブ的な語り手の偏在の効果である。プロットは実に頻繁に中断され、語り手による注釈、脱線が連鎖することでリニアな時間軸はたえず中断されるけれども、重要なことに、それゆえにますます読者の期待はプロットの成立へと導かれ続けることになる（もちろん最後まで、その期待は裏切られ続ける）。演劇とは逆に、時間の重層化によって反復されるように感じられるエピソードとその注解の累積・反復は、かくして物語の解体の契機をはらむ装置として機能しうることが確認された。こうした技法は 20 世紀の小説においても顕著に継承されており、たとえば現代作家、ノーベル文学賞受賞作家であるカズオ・イシグロの作品を具

体的に分析してみることも有意義な確認作業となった。

４．研究成果

Christopher Marlowe, *Dr. Faustus* に顕著なように、キリスト教的時間概念、すなわち天地創造から最後の審判へとリニアに進行する世界観に支配された演劇作品においては、現世における罪（の意識）の増幅は、登場人物の死によって遮断されるまで止むことがない。そこでは死は罰であるとともに快方、場合によっては救済そのものでもありうるはずだ。悪魔との契約によって現世での「全知全能」(舞台の制約を逆手に取ったかのように矮小化されて表象される）を手にした主人公は、しかしながらそれを活用することができない。時間は無為に過ぎ焦燥感に包まれた幕切れを迎えるが、そこに冷徹なまでに無言で偏在するのは、確約された堕地獄へのカウントダウンというたしかな時間の流れである。この意味で中世以来の宗教劇の伝統にいささかなりとも連なる性格を持つ近世演劇は、直線的で取り返しのつかないものとしての時間の枠組みを、なんらかのかたちで前景化することになる。終幕に近づくにつれて演劇の上演時間は、プロットの進行時間に接近してくる。圧縮された時間が現実の時間の経過速度に接近するにつれて、「リアリズムの時間」とでも呼ぶべき効果が高まってくることを、近世初期の演劇は最大限に利用していた。

こうした傾向に作為的に反するかのように、Shakespeare, *Hamlet* は、終幕の破局へ向かう時間への意識を、何度も中途で止め、巻き戻すかのような効果を色濃く纏っている。劇中で言及されるトロイ陥落からヘキュバの愁嘆場とガートルードの寝室の場面をはじめ、劇中劇も、個々の脇筋も、すべてはハムレットのプロット、それも劇の時間の外、あるいは前後の時間への展望・延長・オルタナティブな可能性として / あるいは不可避の運命の投影として構成されている。のみならず、それらの断片は、時系列の秩序を超え、物語の遠近法を逸脱する。この意味で『ハムレット』という戯曲は、それまでの演劇の時間軸を超越したユニークな作品であると言える。主人公ハムレットのみならず、戯曲の構成それじたいが幾度となくプロットを遮るこの特色は、野家啓一が『物語の哲学』(2005)でみごとに考察してみせたとおり、近代における「物語の危機」を、そしてそれに代わる説話構造の登場を、じつに早い段階で表象し、かつ共有してみせようとした先行事例ということができるだろう。戯曲が上演という不可逆に線形の時間的枠組みを逸脱しなければならなくなったとき、「小説」の登場は必然となった。そのことは、ジャンルとしての小説(novel)が、その名に違わずまだじゅうぶんに「新奇な」ものであった時期に、Lawrence Stern, *Tristrum Shandy* においてすでに顕著である。スターンの語りはその作品内部にありつつ、プロット、焦点化といった、物語形式において考慮すべきおよそあらゆる要素におけるクロノロジーの作為そのものにたいして驚くほど自覚的・批判的なポーズをとり続けることで、小説というジャンルそのものの異様さについて、鋭く告発し続けるかのようであり、その告発そのもので成り立っていると言っても過言ではないだろう。この意味で、小説というジャンルの特性は、物語にではなく、物語の困難さ、あるいは不在にこそ求めうるというパラドックスが確認されうるのであり、こうした小説における「物語ること」への困難さという一大主題は、その後もくりかえしさまざまな作家・作品において繰り返し実験されてくることになる。本研究では考察のための具体例として、ノーベル賞作家カズオ・イシグロの長編第一作である『遠い山なみの光』に、時間の制約からの解放によってはじめて可能となる「信頼できない語り手」の技法を確認することで、こうした展開を文学史的射程に捉え直してなお、この問題系が問うにたる意義を持ち続けていることを確認することができた。語り手が語らないことによってしか語られ得ない物語を読者に手渡すことがいかにして可能なのか–小説とは脱物語に他ならないことを、近世英国演劇におけるプロット構造の研究の延長線上に確認することができたことは、本研究の当初の目標設定からはいささか逸脱したとさえ思えるところではあるが、数多くの等質的なエピソードがさまざまな遠近法を駆使した登場人物たちの断片的な語りによって、多声的に構成されてゆく意匠については、小説研究と演劇研究にあらたな接点の手がかりが得られたことは、望外の収穫であった。だがなぜ近世英国演劇における時間の概念の研究が、イシグロの小説を対象とするのか？それは、『遠い山なみの光』における脅迫観念的なまでの同一モティーフの反復が、『ハムレット』におけるそれを–たとえ創作段階において無意識であるにせよ–「物語論的に」踏襲していると考えうるだけの類似構造を持つからである。語り手である登場人物が幾度となく言いよどみ、叙述をためらう先に見えていることは、時間軸を超越して反復・変奏される「罪の記憶」とでも呼ぶべきエピソード、それも言説化されまいと物語化を拒み続け、まさにその拒否それじたいの物語としてたち起こってくるプロットの造型である。この原型を、本研究では『ハムレット』の構造に求めたわけであるが、その変奏はその後の文学史全体を貫くひとつの伝統を形成していると言って良いだろう。この伝統の存在に光を当てることができたことは、本研究を遂行するにあたっての思いがけない副産物となったものであり、今後の研究のための重要な指標を与えてくれたものと考えている。なお、『ハムレット』におけるエピソードと時間の関係性については、現在最終的な考察に入っており、おってその成果も公表できる見込みである。

いまひとつ、本研究の成果として記しておきたいこと、それは 17 世紀から 18 世紀にかけての時間にまつわる科学史的成果が文芸一般に及ぼした影響の大きさである。フランスとの軍事的緊張関係やオランダ海軍にたいしての屈辱的敗北など英国の社会を揺るがした脅威は、転じ

てグリニッジ天文台設立を端緒とする天文学・計時技術・航海術の爆発的発展を誘発し、結果的に大英帝国拡大の駆動力につながった。イングランドに護送されるハムレットが海戦の末海賊に拿捕されてデンマークに戻るというエピソードには、海洋覇権をめぐる国家的焦燥感が色濃く刻み込まれているのである。煉獄で焼かれる父の亡霊の真偽を疑う科学的合理主義は、亡霊出現の「時刻」へのこだわりや天体の運行への言及にもほとばしっている。この意味で、ハムレットの苦悩は暗黒時代の迷信と近代科学の合理性の間に引き裂かれた時代を生きる魂の苦悩といってよい。そこでは神話のエピソードが登場人物自身の運命と不気味にシンクロするばかりでなく、劇に登場するすべての主要人物の運命をもまた反復と変奏の渦へと引き込んで行く。この反復はやがて、父を殺害されたことへの復讐という本来きわめて異様な状況を、かぎりなく普遍化することになるだろう。そしてその異様な普遍化の背後には、科学的合理主義へのまなざしがたしかにはたらいているのである。ハムレットは自分に取り憑いて離れない強迫観念を、可能な限り差延に引き渡し続けることで、最終的に状況の普遍化にたどりついた。これにたいして、イシグロの小説の主人公・語り手は決定的事実を都合良く忘却・隠蔽してしまうまさにその身振りによって、読者にその決定的事実の存在を知らしめてしまう。語られることのない物語はいかにして「語られる」のか。現代文学研究のひとつの問題系へのアプローチは、じつに近世初期英国演劇の読解を通じて得られるのかもしれない。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）
境野直樹（単著）　「記憶と忘却の物語–『遠い山なみの光』を読む」　『岩手大学英語教育論集』第 20 巻、2018 年、44-61．　査読　無
〔学会発表〕（計　0 件）
〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。